

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年9月7日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16649

研究課題名（和文）中国護法神像の生成と変容に関する研究

研究課題名（英文）Study on the Visualization and Historical Development of the Dharma Protecting Deities in China

研究代表者

大島 幸代 (OSHIMA, Sachiyo)

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：60585694

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国南北朝時代に仏教の護法神がいかなる信仰を受け、その中で護法神の図像や造形化の行為がどのように変遷してきたかを史的に跡付けることを目指すものである。僧伝史料や現存作例などの分析を通して、護法神の造像の端緒に、インドや西域と中国との間を往還した高僧が介在し、その護衛の説話が造像の起源を伝えることを明らかにした。さらに、そうした生成の説話と具体的な作例が残る迦毘羅神像をとりあげ、その信仰史を復元的に考察した。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to unravel what triggered the visualization of the dharma protecting deity images, and the historical background behind the visualization. For this end, the study set out to trace the historical development of the cult of these in China as seen. Based on the analysis of the Buddhist narrative literature, the study obtained that the venerable Buddhist priests who traveled between India/Central Asia and China to transmit the dharma has influenced on the religious space related to visualization of the dharma protecting deities. In addition, this study try to reconstruct about the true history of the cult of 迦毘羅神, through on-site surveys of artworks, and through wide search of manuscripts and stone inscriptions for relevant resources such as records on the creation of images.

研究分野：仏教美術史

キーワード：仏教美術 仏教図像学 南北朝時代 天部 高僧 羅漢 伝法

1. 研究開始当初の背景

仏教經典中には、仏教と仏法を奉じる時・場・人を守護する多くの護法神が登場する。インドや中央アジア等の西域でも一部は像に表わされてきたが、とりわけ中国では、多様な護法神が図像を与えられて可視化されてきた。

唐代以降の仏教美術においては、金剛力士・四天王・八部衆・十二神将など、一定のまとまりをもつ護法神グループが、名称と図像形式とあわせて明確に認識されている。この時期、護法神は整理・統合等の過程を経て、それぞれの差別化が図られ、図像形式においても概ね定型を持つに至った。こうした正体の明らかな個別の護法神については、日本や韓国での展開も含め信仰史や図像形式の変遷が明らかにされつつある。

しかしながらそれ以前の南北朝時代には、唐代以降以上に多種類の護法神の造像が確認でき、しかも一時的に造像が行われただけで短時間で姿を消した種類も多く、現在では正体の分からない護法神らしき像が伝存している。この時期の護法神像の世界は混沌とした状況にあり、雑多さをはらんでいるのである。

南北朝時代の護法神信仰は、その後、唐代で概ね確立をみ、東アジア各地に波及していくことになるため、この時代の信仰内容や造形活動の具体相の把握は護法神信仰史の全貌を照射するには不可欠である。このような問題意識から研究代表者は、研究活動スタート支援「中国南北朝期の仏教美術にみる護法神信仰と造形に関する基礎的研究」(22820069)、若手研究(B)「造形美術からみた中国護法神信仰に関する調査研究」(24720050)によって造形作品の現地調査と文献・石刻資料の調査という両面から、護法神信仰に関わる基礎データを収集・整理し、基礎的な研究を行ってきた。本研究はその成果を継承し、さらに発展させるものである。

2. 研究の目的

本研究では、多種類の護法神を包括的に捉える視点を重視し、唐代に整理・統合の過程で消えてしまった正体不明の護法神をも含め考察の対象とした。その上で、高僧あるいは羅漢信仰と護法神との関係に着目して、南北朝時代から隋唐代にいたる護法神信仰の歴史の変遷の全体像を跡付けることを目指した。護法神像の種類と信仰された地域が強く結びつく場合があるため、護法神信仰の地域性や伝播関係にも注目した。

3. 研究の方法

3ヶ年の研究期間の各年度とも、1.護法神像および高僧像・羅漢像の現地調査、2.収集データを護法神像の種類、性格と役割、地域性の三点に着目して整理・分析、3.成果の発表と検討、という流れを研究計画の基本としている。特に中国国内を中心に海外で実施する1.現地調査は本研究の中核をなすものであり、中国側研究協力者も参加して行った。国外にて実施した現地調査は下記の通りである。

【平成27年度】

・韓国・ソウル

国立中央博物館が所蔵する中国南北朝時代の石造仏教造像の調査。

三星美術館 Leeum が所蔵する中国の金属器の調査。

【平成28年度】

・中国・北京

故宮博物院における仏教造像の調査：中国護法神像中、最早期の作例である甘肅省甘泉市石仏湾子出土の高善穆造像塔(北涼承玄元年・428年)の調査が主たる目的。

・中国・西安

陝西歴史博物館、西安市博物院、大唐西市博物館における、ソグド墓出土石造作品の調査：西安周辺で発見された安伽墓、史君・康氏合葬墓、康業墓、および洛陽周辺発見と伝えられる安備墓の出土品を表さ

れた神像図像の調査。

【平成 29 年度】

・台湾・台北

国立故宮博物院における張勝温筆「大理国
梵像図巻」の調査

これと並行して、護法神信仰、高僧・羅漢
信仰に関する文字資料の収集・解析を進めた。
現地調査により得られたデータを年度後半
に整理・解析し、問題点を整理して次年度の
研究に備えた。

4. 研究成果

本研究の目的を達するためには、従来研究
の俎上にのぼらなかった、唐代以降に姿を消
した正体不明の護法神らしき存在をも含め
て考察を行う必要がある。本研究では、そう
した護法神のうち迦毘羅神に着目して検討
を進めた。

迦毘羅神は、初期密教経典とされる灌頂経
等に名が挙がり、『月蔵経』の経説によれば
中国の擁護者としての役割が強調される。代
表作例として、隋・開皇九年（五八九）に開
鑿された河南省安陽市の宝山靈泉寺大住聖
窟がある。窟口左右の那羅延神像と迦毘羅神
像は、長い顎鬚、老相、鬼面をつけた鎧等、
中国の護法神像としては特異な図像形式を
用いて造立されている。ソグド墓の墓室内に
置かれた石棺、石棺牀や石門に表された神像
等と比較検討し、両神像の図像にみられる西
方的要素を抽出した。また、こうした西方的
要素と強い関連を持つのが、中国における迦
毘羅神像の造立の縁起を説く説話である。



劉宋の頃、西北インドより渡来した曇摩密多、
あるいは南齊の時に于闐との間を往来した
法献に、造像の契機があると伝えられる。い
ずれも中国への伝法を志す高僧の守護者と
して登場し、出自が西方にあることを示して
おり、大住聖窟の迦毘羅神像はこうした背景
の中で造立されたと考えられる。

迦毘羅神と同様に、南北朝時代には単独で
造像され盛んな信仰を受けたものの、その後
唐宋代には忘れ去られた護法神が他にも確
認でき、今後それらの検討を進めることで護
法神信仰史の全貌を照射することが可能と
なると予想される。

さらに、インド・西域より渡来した曇摩密
多、曇摩掘叉、求那跋摩、善無畏、またイン
ド・西域と中国との間を往還した法献、玄奘
等の高僧の伝記史料等には、その旅路や活動
を守護する善神が登場する。それらの善神の
大半は名前が記されず、正体不明の護法神に
含まれるが、仏教的文脈の中に存在する善神
とみなされ、『法苑珠林』巻 38 に出る曇摩掘
叉の守護神のように、直接的に造形活動と結
びついた例も確認される。これらの説話を整
理し、多様な護法神像の誕生の契機について
考察を行った。『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』
等で伝えられる、玄奘の西域への途次に登場
した大神（後世には深沙大将）も、こうした
文脈の中で捉えられるものと考えられる。

五代・北宋期以降に、東アジアにおいて盛
行した高僧の肖像、あるいは羅漢像の中には、
鬼神や武装した神々が彼らに従う姿が見出
せる。近年、大徳寺伝来の五百羅漢像を中心
に羅漢像研究は大きな進展をみせたが、羅漢
に従う鬼神、童子、異国の風貌を持つ人物、
武装した神々等の出自や意味については解
明をみていない。他方、文献・石刻資料の中
には、高僧や在家信者の寺院建立や経典受持、
戒律守持などの行いに対し、守護を加える善
神の存在が「戒神」「旧善神」「神明」等の様々
な呼称で登場する。これらの護法神の中には

在地の山川の神々や道教の神々という、仏教の外側に存在するものも含まれる。こうした逸話における高僧を取り巻く神々や鬼神は、高僧像・羅漢像中の鬼神や神々との関連が想定でき、今後、具体的な検討を進めていくことで、高僧像・羅漢像の図像成立への影響が明らかになると予想される。高僧像・羅漢像という美術史的文脈から一端切り離し、中国護法神信仰の文脈の中に位置づけなおすことで、高僧像・羅漢像を考察する新たな視座も得られると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

大島幸代「迦毘羅神考 霊泉寺大住聖窟における造像を中心に」、肥田路美 他『アジア仏教美術論集 東アジア2 隋唐』2018年(印刷中)、査読無

大島幸代「高僧と護法神 僧伝史料に伝えられた護法神像の造立」、『佛教史学研究』60-1、2018年(印刷中)、査読有

大島幸代「護法神信仰から見る南北朝時代中国仏教の一側面」、濱田瑞美『アジア仏教美術論集 東アジア 後漢・三国・南北朝』中央公論美術出版、2017年、pp.449-476、査読無

大島幸代「夾江千佛岩摩崖造像的毗沙門天龕 关于其造型特点与建造时期」于春他『四川夾江千佛岩唐代佛教艺术研究』四川人民出版社、2017年、pp.182-201、査読無

[学会発表](計2件)

大島幸代「高僧と護法神 僧伝類からみる護法神の造像」、佛教史學會第67回学術大会、2016年12月

大島幸代「迦毘羅神の造像 護法神の造形化に関する一考察」、早稲田大学美術史学会秋季例会、2015年11月

[その他]

大島幸代「玄奘三蔵と護法神」、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本仏教の通時的・共時的研究 多文化共生社会における課題と展望」学術講演会「玄奘三蔵の説話と美術」、2017年3月

大島幸代、破仏と破損仏 仏像が壊れるということについて、「日本近代における<イコノクラスム> 破壊をめぐる資格表象研究」第2回研究会「廃仏棄釈をめぐる」、2015年

6. 研究組織

(1)研究代表者

大島 幸代 (OSHIMA, Sachiyo)
龍谷大学・仏教文化研究所・研究員
研究者番号：60585694

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

冉 万里 (RAN, Wanli)
中国・西北大学・文化遺産学院・教授